



### SURE SHOT / 1974 XLH



BUILDER

相川拓也

千葉県八街市にある「シャアショット」代表。神戸出身、35歳。国産バイクも大好きだが、H.D.の中ではショベルの1340ccのトルク感が一番だという。店名はBeastie Boysの曲名に由来する。  
◆TEL043-445-0077 www.sureshot.io



# こだわりと追求の軌跡。

MY PRECIOUS  
ビルダーの1台

細部の仕上げ、ボルト1本にまでこだわりを持ち続け、妥協を許さなかったH.D.。ビルダーとオーナーが強力でタッグを組み、作り上げていく過程は、ビルダーにとっても深く勉強でき、探究心を痛られる日々だった。

Photo: Satoru Ise Text: Koji Matsuo

「ステイドを見れば真似でそれこそカレージビルドでした。自分でイジってよく壊してバイク屋に駆け込んだりしてましたよ」  
本格的にバイクに乗り出した大学当時のことを相川はこう語る。そして就職したのは業界大手のレッドバロンだった。  
「短期間ですごい量のバイクを触りました。そこでメカについての正しい知識をひと通り憶えましたね。僕のベースになっているのはそれですね。だからH.D.でも国産でもどんな修理がきても直せる自信はあります」  
その後H.D.ショップを経て、独立したのが6年前になる。旧車レストアからカスタムまで、幅広くこなしている相川だが、バイク屋としての仕事をこう考える。  
「実際に人の命を預かっている責任ある仕事じゃないですか。エンジンエンジンってみんな言うけど、ブレーキまわりとかボルト1本締め忘れたら人は死ぬこともある。そういうのを徹底的に言われてきたから、今はそのおかげでちゃんとしてることができてますね」  
足まわりのボルトのマーキング。締め忘れがないかのチェックを必ず2人体制でやるなど、基本的なことを毎回毎回忠告に行っている。この作業の積み重ねこそが、相川のバイク屋としての実力を物語っている。  
そんな彼が選んだのがこのアイアンだ。  
「コンセプトは70年代の車輛で、'50〜'60年代のレーサーの表現だったんです」  
XR750に代表されるダートトラッカーでは、左足を地面につきコーナーを駆け抜ける。そのためギアとブレーキを右足だけで操作できるようにカスタムされた車輛が多い。このアイアンにはまずその手法を取り入れられたが、そのギンクをさらに磨き上げてしまおうと、こだわり尽くされたマシンなのである。  
「オーナーさんのこだわりがすごかったです。おかげで僕もすごく勉強になりましたね。1個1個のパーツやディテールに対してかなり研究していましたからね」  
特に金属の持つ質感の違い、ステイひとつ



MY PRECIOUS  
ビルダーの1台



快適な走りを見せるXLH。マフラーの取りまわしとデザインを凝詰め、バンク角は十分に保っている。



扱う車種はショベル以前のモデルが比較的多いが、ツインカムフルカスタムやロングフォークチョップなども手がけている。ショップをオープンして以来、少しずつ買い揃えていったという工具は、相川の貴重な財産である。



フロントアッセルカケテイルが出現の多いリアアッセルにユニットを取り付けている。メーターはアールマンキのショートスクーのもの。



タンクはエヴォスポーツベースに製作。ラバーマウントでの4点止め。目立たないが高度のセンスと技術を要す。



通常は左側のリアブレーキペダルは、ブラケットをワンオフし右側に移設。ダートトラックのイメージならではのカスタムだ。



オイルタンクは初期のアイアンスポーツのものを装着。ガスリンタンク同様、ラバーマウントで4点止めされている。



ネック部に追加したライトは、修正の物と同じように塗装の表面を加工している。追加したパイプはラック風に仕上げ、純正から同調するよう塗装を施す。



ブレイクインをパイプの中に通して、追加のアイアンパイプをフレームのボルトで固定する。フレームやパイプの塗装も徹底して丁寧に行っている。



POSH製インナーズロトルでシンプルにまとめたハンドルまわり。左グリップの中になんと基礎を自作したウインカーリレーが仕込まれている。



シートはクサカサキャンピングシート。厚手生地を縫製して座面を調整し、ウインカーの調整も徹底している。



ボラー製H1のFファンダーのものを加工して塗装。初期のXLHのFファンダーのものを加工して塗装。



ヘッドライトのマイクネジはホルトを旋盤で削り加工したワンオフ。ネジ1本までのこだわりは随所に見られる。バッテリーケースはすべてワンオフ。云々白色だったヒューズ内蔵の配線カバーを黒に染めて使用。ヘッドライトのマウント部分は特殊のラグ風加工。言われなければ見落とす箇所だが、サフェーサーを強く吹きかけ表面もザラついた銅粉風に仕上げている。執念とも言えるほどの細部へのこだわりである。



【文中敬称略】

「チャンスを与えてもらいましたね。時間分の工賃なんて絶対出ないですけど、それでもやりたいたいと思う1台でしたね」  
2人がこの1台を眺めながら談笑している姿がとても印象的だった。

「このバイクは見えにくいところに相当時間を費やしてますからね。パーツの裏側も肉抜きしてたり。空室。例えばフラットバーをフライスを溝を掘るじゃないですか。それだけだと単にビレットパーツになっちゃうんで、エッジを削って自然なアールを出す作業をオーナーさんにやってもらっただけです。そうすること全体の肉感が出るし、そうやって統一していったんです」  
タンク、シート、フェンダー、マフラーなど、数ミリ単位でクリアランスを計算し、見事なまでのバランスが確立された。また、外見だけでなく、シリンドラーのアーンプレティンク、ピストンのWPC加工、ローコンプレッションでの低圧稀化など、走りに対する耐久性も考慮されている。

「1台のバイクに賭けるオーナーのこだわりを、相川は自分の技術と経験を持ってフルの力で応えていった」  
「チャンスを与えてもらいましたね。時間分の工賃なんて絶対出ないですけど、それでもやりたいたいと思う1台でしたね」  
2人がこの1台を眺めながら談笑している姿がとても印象的だった。